

【田原市博物館 テーマ展】

言祝ぎの美術 ―新年を祝う―

令和5年12月9日(土)  
～令和6年2月4日(日)

「言祝ぎ(ことほぎ)」とは、言葉で祝うことを意味します。生活のなかで祝いの言葉は欠かせません。言葉からあらわされたものは、やがて絵画化、意匠化され、美術品として現在に伝わります。  
本展では、新年を祝うおめでたい作品を紹介します。

展示室 特別展示室

| 指定 | 作者                           | 作品名                           | 制作年               | 材質     | 形状 | 備考     |
|----|------------------------------|-------------------------------|-------------------|--------|----|--------|
| 重美 | わたなべかざん<br>渡辺崋山              | ぼたんず<br>牡丹図                   | 江戸時代 天保年間         | 紙本淡彩   | 掛幅 |        |
| 市指 | 渡辺崋山                         | いんぶんちく<br>陰文竹                 | 天保10(1839)年       | 紙本墨画   | 掛幅 |        |
|    | 渡辺崋山                         | かんていぞう<br>関帝像                 | 文化9(1812)年        | 紙本墨画淡彩 | 掛幅 |        |
| 市指 | 渡辺崋山<br>渡辺小華                 | ふくろくじゆず<br>福祿寿図               | 江戸時代後期～明治時代       | 紙本墨画淡彩 | 掛幅 | 3幅     |
|    | わたなべしょうか<br>渡辺小華             | はとうずびょうぶ<br>波濤図屏風             | 明治6(1873)年        | 紙本金地墨画 | 屏風 |        |
|    | 渡辺小華                         | きゆうせいず<br>九清図                 | 明治10(1877)年       | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | つばき ちんざん<br>椿 椿山             | やおえんねんず<br>八百延年図              | 天保14(1843)年       | 紙本墨画淡彩 | 掛幅 |        |
|    | 椿 椿山<br>椿 華谷<br>小田莆川         | ごずいず<br>五瑞図                   | 天保12(1841)年       | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | おだ ぼせん<br>小田莆川               | こうばいえんおうず<br>紅梅鶯鶯図            | 江戸時代後期            | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | つばき かこく<br>椿 華谷              | ぼたんし ぼねこず<br>牡丹子母猫図           | 嘉永2(1849)年        | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | ひらいげんさい<br>平井顕斎              | きよくじつほうおうず<br>旭日鳳凰図           | 嘉永2(1849)年        | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | おかもとしゅうき<br>岡本秋暉             | かちょう りゅうづ<br>花鳥・龍図            | 江戸時代後期            | 紙本墨画淡彩 | 掛幅 | 3幅     |
|    | 岡本秋暉                         | しょうかくず<br>松鶴図                 | 安政3(1856)年        | 紙本墨画淡彩 | 掛幅 |        |
|    | のぐちゆうこく<br>野口幽谷              | かいかくほんとう<br>海鶴蟠桃              | 明治22(1889)年       | 紙本着色   | 掛幅 |        |
|    | 野口幽谷                         | ちくせきはくびょうず<br>竹石白猫図           | 大正～昭和時代           | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | まつばやしけいげつ<br>松林桂月            | さいかんせんしよく<br>歳寒仙色             | 明治時代              | 絹本着色   | 掛幅 |        |
|    | 渡辺崋山                         | ひすいず せんめん<br>翡翠図扇面            | 天保8(1837)年        | 紙本淡彩   | 掛幅 |        |
|    | 渡辺崋山<br>立原杏所                 | しょうじゆかいせきずかん<br>松寿介石図巻        | 天保4(1833)年        | 紙本墨画淡彩 | 卷子 |        |
|    | 椿 椿山                         | はなが ぶ<br>花画譜                  | 天保13(1842)年       | 紙本墨画淡彩 | 画帖 |        |
|    | 渡辺崋山                         | ぼいか ず せんめん<br>梅果図扇面           | 天保8(1837)年        | 紙本淡彩   | 扇面 |        |
|    | きよくていばきん<br>曲亭馬琴著<br>渡辺崋山画ほか | げんどうほうげん<br>玄同放言              | 文政元・3(1818・1820)年 | 紙本版画   | 版本 |        |
|    | 渡辺崋山画                        | みくみさかずき<br>三組盃                | 江戸時代後期            |        |    | 下村観山旧蔵 |
|    | 渡辺小華画                        | き ち こうしもんみずさし<br>木地公子文水指      | 明治時代              |        |    |        |
|    | 渡辺小華画                        | そめつけこぼくちくせきもんかびん<br>染付枯木竹石文花瓶 | 明治9(1876)年        |        |    |        |

重美=重要美術品 市指=田原市指定文化財 表記のないものは全て当館所蔵

田原市博物館

## <作者紹介>

渡辺華山 寛政5(1793)年～天保12(1841)年

渡辺定通の長男として、江戸に生まれました。はじめ平山文鏡に師事し、白川芝山、金子金陵、谷文晁らに絵を学びました。華山は写実的な描写にこだわりました。特に肖像画を得意とし、西洋の陰影法を巧みに使い、独自の画風を確立しました。また「一掃百態図」(当館蔵)など、当時の文化や風俗を伝える資料が残っています。

椿 椿山 享和元(1801)年～嘉永7(1854)年

はじめ金子金陵に師事しました。金陵が亡くなった後、同じく金陵の門下であった渡辺華山の弟子になります。蛮社の獄で華山が逮捕された際は、その救済に奔走しました。華山没後は、華山の家族を献身的に支えました。花鳥画を得意とし、輪郭線を描かない方法で花卉図などを多く制作しました。

渡辺小華 天保6(1835)年～明治20(1887)年

渡辺華山の次男です。小華が7歳の時に、父である華山が亡くなりました。その後、椿椿山の画塾に入門し、花鳥画の技法を学びます。22歳の時、兄の立の死後、渡辺家の家督を継ぎ、30歳で田原藩の家老に就きました。明治維新後、内国勸業博覧会の出品や明治宮殿の杉戸絵など制作しました。

椿 華谷 文政8(1825)年～嘉永3(1850)年

椿椿山の長男として江戸に生まれました。渡辺華山の画塾に入門し、15歳の時に「華谷」という画号を華山より贈られた。椿山の後継者として期待されましたが、わずか26歳で夭折しました。

小田莆川 文化2(1805)年～弘化3(1846)年

旗本戸川氏に仕える家の末子として生まれました。渡辺華山の弟子となり、兄弟子である椿椿山と深く交友しました。椿山から手ほどきを受けたため、莆川の花鳥画には椿山の影響が見られます。華山が蛮社の獄で捕らえられた際、椿山と共に華山救済のために奔走しました。

立原杏所 天明5(1785)年～天保11(1840)年

水戸藩の儒学者立原翠軒の子として、水戸に生まれました。19歳で家督を継ぎ、有能な藩士として徳川斉昭の信任を得ていました。絵を林十江や谷文晁に学び、花鳥画や山水画に優れる一方で、重要文化財「葡萄図」のように大胆で奔放な筆致の作品も描きました。

平井顕斎 享和2(1802)年～安政3(1856)年

遠江国川崎(現在の静岡県牧之原市)に生まれました。はじめ掛川藩御用絵師の村松以弘に、のち江戸に出て谷文晁、渡辺華山に師事しました。顕斎は華山の作品を丹念に模写し、山水画を最も得意としました。重要文化財の渡辺華山筆「芸妓図」(静嘉堂文庫美術館蔵)は顕斎へ贈られたものです。

岡本秋暉 文化4(1807)年～文久2(1862)年

彫金家石黒政美の次男として江戸に生まれました。江戸の町人出身母方の姓を継ぎ、小田原藩主大久保家に仕えました。はじめ大西圭斎に師事しました。写実的な作品を描き、華やかな花鳥画を得意とし、「孔雀の秋暉」と称されるほどでした。

野口幽谷 文政10(1827)年～明治31(1898)年

大工の棟梁源四郎の次男として江戸に生まれました。嘉永3(1850)年、椿椿山に師事し、花鳥画を学びました。明治5(1872)年のウィーン万国博覧会や明治10(1877)年の第1回内国勸業博覧会に出品し、画技を認められました。明治23(1890)年、橋本雅邦らとともに帝室技芸員に任命されました。弟子に椿山の孫である椿二山や松林桂月などがいます。

松林桂月 明治9(1876)年～昭和38(1963)年

山口県萩市に生まれました。明治26(1893)年に上京し、翌年、椿椿山を師とする野口幽谷の弟子になります。日本美術協会展や文展に出品し続け、南画界の重鎮と言われます。昭和19(1944)年、優秀な美術家へ与えられる帝室技芸員に任命され、昭和33(1958)年には文化勲章を受けました。